

電子顕微鏡学会そして顕微鏡学会

小室輝昌

早稲田大学人間科学学術院



電子顕微鏡に出会った、初期の上り坂の時代を振り返ると、1966年、京都の国際電子顕微鏡学会には、後のノーベル賞医学生理学賞受賞者のPaladeや、日本の多くの電子顕微鏡学者の育成に寄与されたBennettら、錚々たる研究者の参加があり、遠くからまぶしく見つめたことを覚えている。また、定例の国内の学会

においても、時代を牽引する第一線の研究者が常に競い合っていた、会場の熱さが思い出される。

研究手法としての電子顕微鏡が一世を風靡した時代が去り、観察手法の多様化に伴い、学会の名称が変更され、今日に至っていることは、過渡期における役員の方々の苦慮の結果と、新しい船出への意気込みを掲げたものと推測している。さて、その名と経緯が示す如く、電子顕微鏡的研究の減少はよしとしても、形態学的所見に軸足を据えた研究そのものが減少している傾向は、多少、気になるところである。

近年の分子生物学的研究の流れに沿った影響は当然としても、それと同時に、手間ヒマのかかる地道な研究が成り立ち難い側面が気にかかるのである。

経済効率を求める一般社会とは一定の距離を保つべき学問の世界においても、研究費の獲得額と安直な業績主義が重要事項となり、人事にも影響を及ぼす環境の中では、息の長い(歴史の評価に耐えるような)研究を若い研究者に望むのは無理であろう。年に数編の論文を出せるような研究を志向し、戦略的に多数の連名で量産する研究室の一翼を担うこともむべなるかな、である。

また、同様の風潮は、大学や研究機関、病院に“外注”制度を発達させ、優れた技官(技術員)を失った現状では、組織標本の作成に支障が生じ、デジタル画像での組織実習もあると漏れ聞かすが、果たして時代の趨勢として受け入れるべきものなのであろうか。

種々の現象が連動している現在の社会的風潮の中で、方向性を修正することは極めて困難なことと思うが、各人が、それぞれの立場で意見を表明していくことが肝要かと思う。殊に、各種会議体の要職にある方々には、是非とも一考をお願いしたいところである。

研究や教育の状況が表層を流れ続ければ、内部は空洞化する。

本来、研究とは、字義から言っても丁寧に時間をかけて成し遂げるものであろうし、それを通じて、研究者も育っていくものと思えるが、あらためて現在の研究環境を見つめ直し、将来を見据える必要があるように思う。

この紙面に、何やら大上段に振りかぶった文章を寄稿することの唐突さは、自身感じるところであるが、事の要因は研究環境全体にあり、本学会の発展を考える上でも、一学会の内部的思考を超えた打開策が必要と考えるからに他ならない。

“電顕写真の読める研究者”は、豊富な経験に裏打ちされた知識によって始めて可能なことであり、意味ある構造と人工産物との境界は、多数の実体験をなくしては判読不可能であるが、それを許容するゆとりが現在の研究社会にはないように思われる。

古いものを懐かしみ、賛美するのが主旨ではない。ただ、時代の風潮に逆らっても、良いものが生き続ける環境は保持していく必要がある。一度失われると回復の難しいこともある。

ここまで書いてきて、何となく捕鯨の問題を連想する。ほそぼそと続いている調査捕鯨は、一説によれば、専門技術、知識伝承の場として、是非とも必要なことと聞く。鯨という大きな生物の体を大きな刃物で手早く解体処理する熟練した技術の維持には、文字や言葉では尽くせない、現場での実施が必須であるという。ここでは捕鯨の是非は議論の外に置くが、国際機関の決定とは言え、かなり偏った勢力図の下に、大きな流れが続くことには、何か腑に落ちないところがあり、ある種の理不尽さを感じるのには私だけではあるまい。

生物の多様性は、未来にわたる地球環境、人間社会の健康さを維持する上で重要なものと考えながら、研究社会においても多様性の保持を考える時期にある。

生命現象を取り扱う生物医科学の研究分野において、研究対象の本質に近づく多面的解析は、各手法の専門家が居てこそ成り立つことであり、それぞれの分野に伝わる専門的技法は知識と共に確実に伝えられていくことが重要である。流れを追うあまり、多くの研究者が母屋を留守にすれば、家は荒れ衰退しかねない。

既に絶滅危惧種の“写真の読める人”や“連続超薄切片の切れる人”を本当に絶滅させてはならないように思うが、これも仕方のないことなのであろうか。

我々の五感のうちで最も強力な認識力をもつ視覚、優れた分解能と汎用性を兼ね備えた電子顕微鏡を梃にもつ学会が、更に大きな力を発揮することを祈りたい。

小室輝昌 (Terumasa Komuro)

1964年 東京教育大学理学部生物学科 卒業
1965年 新潟大学医学部解剖学第三講座 助手
1968年 九州大学医学部解剖学第一講座 助手
1973年 愛媛大学医学部解剖学第二講座 助教授
1991年 早稲田大学人間科学部教授 (現在に至る)